

5 66次1号池出土かわらけに関する若干の考察

松本建速（筑波大学博士課程）

1 数量

66 1号池 3～5層から28点のかわらけが出土した。完形品17点、残存率90%が1点、他の10点は残存率70～25%の破片である。池が作られて最初の段階で埋まった5層から出土したかわらけは20点である。そのうち、完形品あるいはそれに準ずると考えられるものは16点で、その内訳は、大皿が7点（ロクロが1点、他は手づくね製品である）、小皿が9点（ロクロが4点、他は手づくね製品である）である。

2 出土状況

5層から出土した完形品のすべてと、ロクロかわらけ底部破片の3127・3128は正位の状態で出土した。

池の西端は調査区外にあたり、調査していないので、池に伴うかわらけがこれらすべてであるとは言えないし、池とかわらけの関係を述べることは完全にはできない。だが、かわらけが池底の粘土上に載った場合、粘土全体が動かなければ簡単にはかわらけも動かないと考えられる。よって、かわらけの位置はほぼ12世紀当時のままと考えて推測するならば、これらの完形品のかわらけやそれに準ずるかわらけの中には、3102・3104・3126・3127・3128のように、池中央を目指して投げ入れられた場合があったようである。

一方、同じ5層出土でありながら、筐塔婆の多くは池の南側に偏って分布している。池の水に流れがあるとすれば、池の形態から考えられるのは、22.9m以上の水があった場合には、東に向かう流れである。南に偏る筐塔婆の位置は、流された結果の位置とは思われない。水の流れを無視できる場合、水に浮き、しかも軽くて遠くに投げづらい木製の筐塔婆は、入れられた位置に近い場所に堆積したと考えられる。ほとんどの筐塔婆は池の南側から入れられた可能性がある。それらの筐塔婆の位置がそれらを入れた人々に望まれた位置であるならば、かわらけの場合は筐塔婆を置きたい場所とは異なる位置が望まれたことになるだろう。

同じ5層でも馬の歯や轡は池北東隅にある。その付近に手づくね小皿3103や手づくね大皿3115がある。

3 形態・製作技法・胎土

かわらけが多く出土しそれらの使用年代が推測されている柳之御所遺跡出土品の分類をもとに記述する。

形態・製作技法は、ほとんどが1段なで技法D₂・D₃型である。3120・3121・3122の3点だけが2段なで技法C₄型である。ほとんどのものの外底面に粘土板の両端を寄せて貼り付けた痕跡が見える。2段なで技法のもののうち3121は非常に特徴的な形をしている。真横から見た形は、左右対称な台形を逆さにした形である。それは、まるで内型に入れて作ったかのようである。柳之御所遺跡では非常に少ないタイプである。3113は1段なで技法で、3121に比べ、器が浅いが、器内面のなで、口縁部のなでの雰囲気や口縁部内面をなでた時に口唇部の内面側が少し抉れる形などは3121に似ている。形態・製作技法・胎土とも3108・3111・3112・3114・3115・3116は類似する。これらは、口縁部の形状が若干異なるが、3113にも似る。それほど違わない時に、ほぼ同じ技術で製作されたと思われる。

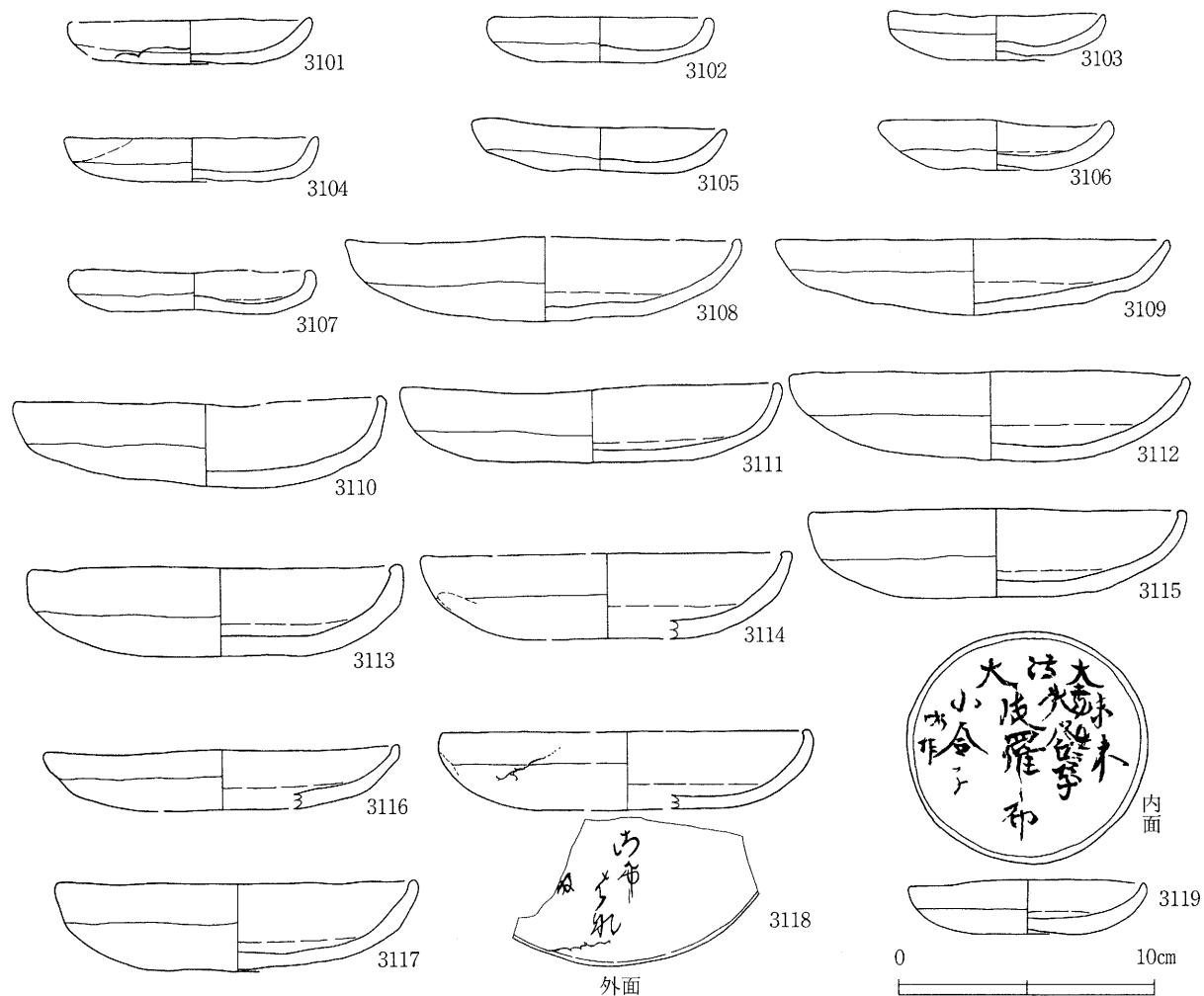
3104・3105・3119は表面の風化の度合いが低く、器外底表面には指紋が多く残されている。

手づくね製品の多くは、器を整形した後、内底面を横に一方向あるいは複数方向に重なるようになで、口縁部全体をつまみなでている。その際、水をよく含ませた布のような柔らかなものを用いてつまんだと思わ

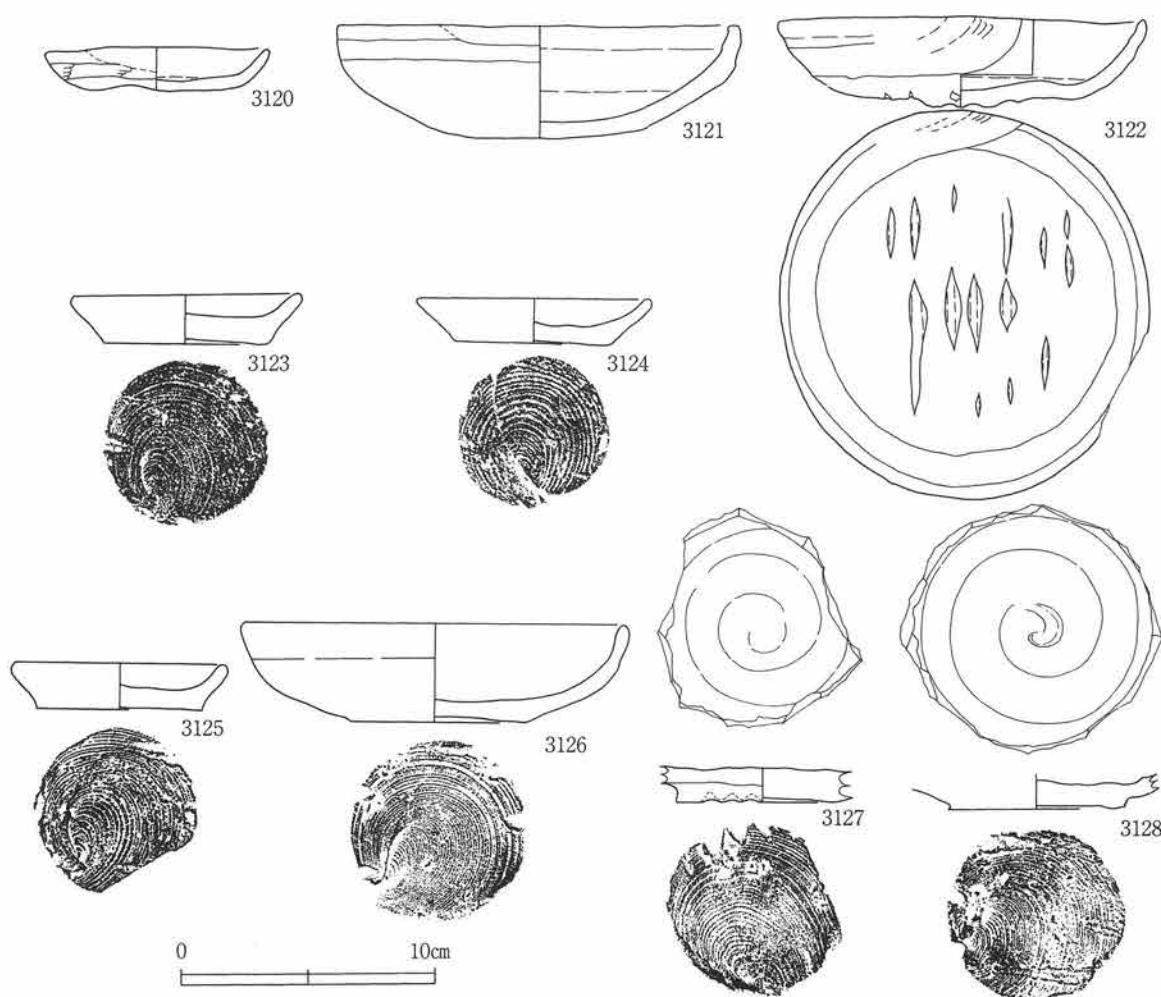
れる。指だけでは到底つまめない内面底の平らな部分にまでなでられた痕跡はおよんでいるのである。

ほとんどのものの外底面に、製品を乾燥させる際に、器自らの重みでついた痕跡が見える。その痕跡は、平泉町教育委員会1994などで「スノコ痕」と呼ばれているもので、器を載せた場所にあった物質の形状を写した痕跡である。池出土の製品に残された痕跡の多くは、幅5mmほどのヨシ、あるいはシノダケの茎と思われるものの凸部が平行してプリントされたものである。3122の場合は、器がやわらかいうちに、乾燥させる際に置いた場所の上で器内面底をなでたので、「スノコ痕」が他の製品に比べて、深く残っている。

ほとんどの製品の胎土中に海綿状骨針と細かな金雲母が入る。海綿状骨針は、ロクロ製品の3123・3125・3127・3128には一見して多数が見えるほど多量に入るが、他の製品の場合、少量しか入っておらず、時間をかけて探さなくてはならないほどの極少量しか入っていないものも複数ある。



第251図 1号池かわらけ①



第252図 1号池かわらけ②

4 使用状況

くぼ地である池に、「円いかわらけの完形品」を入れることに意味があった可能性がある。ロクロかわらけ大皿の底部破片3127・3128も、それらの周辺から出土した手づくねかわらけ小皿の完形品（3102・3104）とほぼ同じ直径であり、円板状なので、かわらけ小皿と同じ役割を与えられたのかもしれない。

「祓い」にかかわるであろう文句が書かれていた3119は、文句が書かれた内面を上向きにして、正位で出土した。ただし、文字が器内面に書かれた後、器内面には炭化物が付着しており、器に油が入れられ火が灯された可能性がある。その後、3119は池に入れられたのである。これらの行為が、「祓い」に関係があるのか、器の第一次使用目的から別の使用目的へと転用され、池に入れられたのかは不明である。3102の内面にも炭素が吸着しており、二次的に焼けてもいる。3112・3115の外表面や3110・3114・3122の内面にも炭素が吸着している。3115・3122には二次焼成の痕跡がある。器外底面に文字が書かれた3118の内面にも炭化物が付着している。以上の炭化物の多くは器内面で火を焚いた際に付いた痕跡と思われる。また、3118の場合、かわらけは全体の25%ほどしか残っていない破片として出土した。文字も全体の一部しか残されていない。書かれた文字の内容は、池にかわらけを入れることとは無関係であると推測できる。

5 推測される使用年代

出土したかわらけの形態・製作技法・法量から推測されるその製作・使用年代について述べる。口クロかわらけ大皿は、柳之御所遺跡のものとの対比では、R d 02型にあたり、柳之御所遺跡ではI・II期両期に出土するものだがII期に多い。1段なで技法の手づくねかわらけ小皿もI・II期両期に出土するがI期に多い。1段なで技法手づくねかわらけ大皿もI・II期両期に出土するがII期に多い。だが、手づくねかわらけを真横から見た場合、I期のかわらけは底部深さと口縁部幅の割合がほぼ同じくらいであるのに対し、II期のかわらけは底部深さよりも口縁部幅の方が広くなる傾向がある。よって、池出土かわらけはI期に入れられる。

また、池出土の1段なで技法手づくねかわらけ大皿は、直径が14.0~15.6cmにおさまる。柳之御所遺跡ではI・II期両期にまたがる形態・法量の製品が多くあったが、II期の1段なで技法手づくねかわらけは、I期よりも小さくなる傾向があり、複数枚の完形品が出土するような遺構出土品の場合、直径13.5cm以下の製品が混じるのが普通である。ただし、池出土品のように、出土手づくねかわらけのタイプが4つほどにしかわかれないので、法量にたよって絶対年代を考えることは難しい。それでも、あえて言うならば、法量から考えても、池の出土品はI期に入ることになる。

しかしながら、1段なで技法製品が主流であることを考えると、I期でもII期に近い頃と考えるべきであろう。柳之御所遺跡では、II期とは1175年頃以降と考えられた時期である（岩手埋文1995）。661号池出土かわらけは、柳之御所遺跡出土遺構と比較するならば、28S E 4や「人々給絹日記」墨書折敷が出土した28S E 16の頃、つまり1170年前後のものと推測できるのではなかろうか。

（財）岩手県埋蔵文化財センター 1995 「柳之御所跡」第21・23・28・31・36・41次報告書 第228集